Forex

株式会社　ジャパン
エコノミックパルス
〒103-0007
東京都中央区日本橋浜町
2-33-5
Tel 03-5962-3910
Fax 03-5962-3913
www.j-pulse.co.jp
info@j-pulse.info

Market Insight

2026年2月16日（月）

全般円高、持続余地と揺り戻しにらむ

高市取引の今後、米指標、FRB政策、米株など焦点

今週の為替相場はドル/円、クロス円での全般的な円高・外貨安に関して、持続余地と揺り戻し的な円安・外貨高をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が152.00－154.80円、ユーロ/円が179.00－183.80円。前週は日本の衆院選での与党圧勝を受けた一旦の材料出尽くしのほか、野党の要求配慮や選挙対策としての減税・財政出動の必要後退、日本の政治安定化の期待などで円高が進んだ。今週は高市トレードの今後や米国の経済指標、米FRBの幹部発言と今後の政策、不安定化する米国株の動向などが焦点になる。

衆院選前や昨秋からの高市取引「過熱調整余地」見極め

今週の為替相場で注目されるのは、2月8日の日本の衆院選での与党圧勝を受けた高市トレードの今後の動向だ。選挙前には与党勝利予測による積極財政の強化とインフレ上昇の刺激、日本国債の価格下落（金利は上昇）の各懸念などにより、ドル/円とクロス円で円安と外貨高が加速された。

一方で実際の選挙では与党が圧勝となったが、選挙後は全般的に円高と外貨安が優勢になっている。今週以降は円高の流れが続くか。あるいは円高・外貨安の一服と横這い化による外貨の下値固めや、揺り戻し的な円安・外貨高へ移行を見極める展開となる。

日本の衆院選以降の円高については、背景として衆院選前や昨年10月以降の高市トレードの一旦の材料消化と円売り（円ショート）ポジションの巻き戻し、与党の圧勝による野党の要求配慮や選挙対策としての減税・財政出動強化の必要後退、日本の政治安定化、衆院選前の円安・日本国債安の加速を受けた日本国債の割安感と一旦の買い需要、日本の当局による円安抑止の口先介入や実弾介入への警戒感などがある。

このうち高市トレードに関しては昨年10月以降、ドル/円とクロス円での円安が半年近くの持続となってきた。現状は過熱警戒もあり、衆院選での与党圧勝による「高市劇場の第一幕一段落」もあって、円の売られ過ぎ調整的な円高・外貨安が一定程度は持続となる可能性もある。

その一方で中長期スパンでは、ドル/円、クロス円ともに円安・外貨高の基本トレンドが継続との見方も少なくない。背景としては、潜在的な日本の財政不安や、日本の貿易・サービス収支の赤字等による需給面での円安圧力、日米両政府の対米投資合意等を含めた日本企業による海外直接投資の残存、円転と日本国内への資金回帰の抑制、日本の法人・個人による対外証券投資の余地、日銀による現状段階での金融緩和的な政策の持続（実質金利のマイナス継続や、量的な資金供給の高止まり＝円余剰残存）、他国比での金利や成長率の低さなどがある。

円高持続と円再下落の一つのカギを握るのが日銀の動向だ。米金融大手ゴールドマン・サックスのストラテジストは16日にかけて、「足元の円高を理由に日銀が利上げペースを速めなければ、衆院選後に進んだ円高の流れが損なわれ

WARNING! 記事並びに情報はすべて株式会社ジャパンエコノミックパルスに帰属しています。無断転載及び転送は法的に罰せられますのでご注意ください。

〒103-0007 東京都中央区日本橋浜町2-33-5 マリオン浜町ビル
TEL (03) 5962-3910　FAX (03) 5962-3913
E-Mail info@j-pulse.co.jp　URL http://www.j-pulse.co.jp
発行責任者：上坂　郁　　編集長：原田　祥二

る」、「円高はやや行き過ぎで、円安トレンド再開の余地も」といった見通しを示している（ブルームバーグが引用で紹介）。その他の注目点は以下。

＜ドル単体は急落一服、ドル/円とクロス円への影響焦点＞

今週の為替相場では、ドル単体の動向が注目される。ドルは1月後半から広範な通貨に対して急落となったあと、前週にはドル安が抑制されている。今週以降、ドル安の歯止めが続くと、ドル/円はドルの下値切り上がりやドル反発の余地がある

一方で前週にはドル安一服と裏表により、対ドルでユーロやポンド、スイス・フラン、カナダ・ドル、豪ドル、NZドルなどが上昇一服で伸び悩んでいる。クロス円取引では、対円でこうした非ドル通貨が連れ安になっている（円高）。米国株の下落と不安定さも、これまでリスク選好相場で売られてきたドルや円の買い戻し要因となってきた。

今週以降はドル/円でのドル安一服やドル下値切り上げが、クロス円でも外貨安・円高の抑制や外貨の下値切り上がりにつながるか。あるいはドル/円でのドルの上値の重さが、クロス円での外貨の上値抑制と円高圧力へと作用し、ドル/円、クロス円で円高・外貨安の流れが続くかの見極めとなる。前週からのドル安抑制の要因としては、米雇用統計の改善や、米物価指標の落ち着きなどによる米国債の安定化、金などの貴金属相場急騰とドル安の過熱調整などがある。

1月以降は米トランプ政権による対外強硬姿勢や、欧州との関係悪化などがドル安の一因となってきた。その点では前週末14日、独ミュンヘンで開催されたG7外相会合で米国のルビオ国務長官が深刻な相互不信に陥る米欧関係について、「再び活力ある同盟関係を望む」と呼び掛け、関係の立て直しを図っていた。今週以降、ドル安歯止め材料の一因となるか注目される。

＜ドル/円の週足、下値抵抗線の上抜け維持焦点＞

為替相場のドル/円は週足テクニカルで、昨夏以降の下値抵抗線の上抜け維持と、各ラインなどを下値メドとしたドルの下値固め、下限切り上がりが焦点になっている。ブルームバーグのレートによると、前週末2月13日時点の数値では、下値抵抗線として26週移動平均線153.15円、週足・一目均衡表の基準線152.47円、35週線151.52円、40週線150.62円などがある。

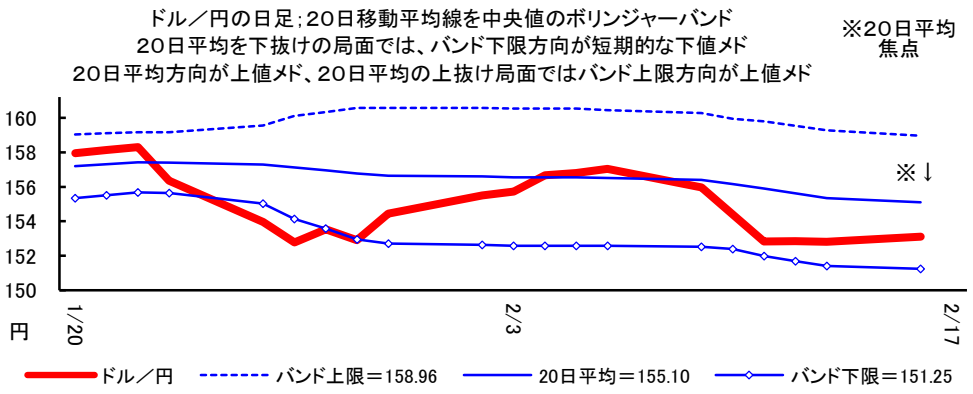
＜米国の経済指標＞

今週の為替相場では、米国の経済指標に一喜一憂の不安定さが続く。最近の米国指標は小売売上高が悪化、雇用統計は改善、CPI（消費者物価指数）は低下の日替わりメニューとなっている。

今週の住宅や生産、景況感の関連指標は、昨年9月以降のFRBによる連続利下げや、長期金利の上昇抑制、関税不透明感の緩和などが支援材料となる。20日のインフレ指標、PCEデフレーター（個人消費支出の価格指数）については、前週のCPIに続く物価の落ち着きが注目されやすい。

＜米FRB幹部の発言と金融政策＞

今週の米国ではFRB幹部の発言機会が相次ぐ。前週は雇用統計が改善、CPI（消



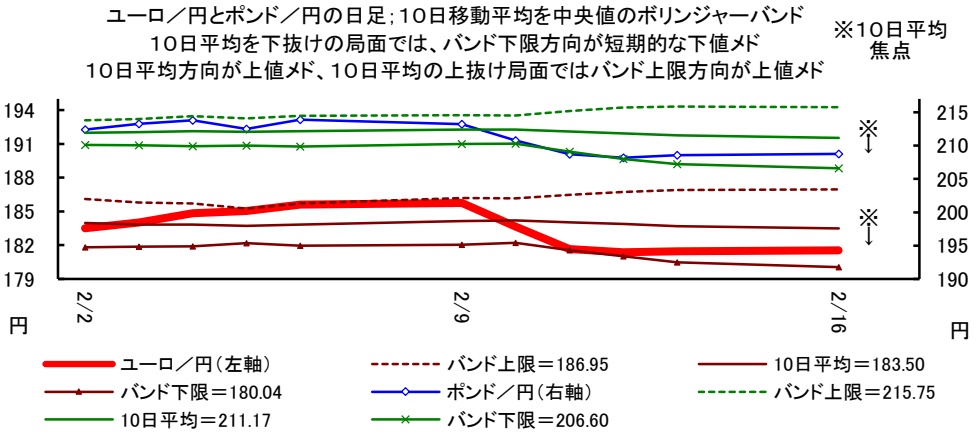
費者物価指数）が低下となったが、先物市場などでの利下げ確率は、0.25%の利下げが年央にかけて1回、年後半にかけて1回という計2回となってきた。

為替相場では前週にかけて年2回の利下げの織り込みは進み、全般的にドルは下げ渋りとなっている。今週以降、利下げ時期の前倒しや利下げ回数の増加といった観測が高まらない限り、ドル/円を含めてドル安の余地が限られたり、ドルが下値固めから反発となる可能性がある。

＜米国株の下落や不安定さを見極め＞

米国株は前週にかけて、下落や不安定さが見られている。為替相場では安全逃避や損失穴埋めによる米国本国への資金回帰やドル現預金への資金逃避、ドル売りと非米国資産投資や貴金属投資の巻き戻し等により、ドルの下支えやドル高の要因として注目される。一方で円についても、円調達キャリー取引の巻き戻しにより、クロス円主導で円高と外貨安の要因となる可能性が無視できない。

前週までの米株市場ではAIを活用した革命的なソフトウェアやプラットフォーム等の開発を受けて、既存のビジネス・モデルが脅かされる業界の株価が急落になっている。同時に米国企業によるAI関連の巨額な設備投資に関して、投資額見合いでの収益回収の成果度合いに疑心暗鬼が漂っている。



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。